

扉を開く

外国人材育成 八戸学院の挑戦

①

「はじめまして。私の名前は」「私の国はフィリピンです」「どうぞよろしくお願ひします」

フィリピンの首都マニラから車で約3時間のサンマニエル市で、学校法人光星学院(八戸市)などの共同運営により今年13日に開校した「八戸学院カーテル校」。周囲をマンゴーの木が囲む教室に、生徒たちが日本語を読み上げる声が響いた。

同校で日本語を教える島尻昌弥さん(29)は「読む・聞く

比にカーテル校開設

・書く・話すの4技能を伸ばしたい」と意気込んだ。フィリピン大学などで日本語を教え、カーテル校の授業にも助言するジュニロー・エスピリトゥさんは「よろしく」の説明に時間をかけた。「英語やフィリピンの言葉で翻訳にくい表現だが、将来日本で勉強や仕事をするなら覚えなければいけない。言葉の背景にある文化をどう伝えられるかを考えている」という。

日本の中学2年に相当する8年生のクリーザ・アンジェラ・トワソンさんは「日本語の授業はわくわくしました」と笑顔。10年生のカトリナ・マリー・グラントスさんは「以前にも日本について勉強したことがあり、日本に興味を持っています。八戸で医療を勉強してみたい」と語った。

交流・連携に高まる期待

同校は本県はじめ日本での文化を伝える教育を行う。フット・アレナス理事長は「教育の充実が貧富の差の解消につながる。言葉や文化の壁で挫折してしまうことのないようにしたい」と、開校の意義を語る。少子化や人口減少が進む中、国際化に向けかじり切った光星学院の法官新一理事長は「自分たちの未来をどう描いていくか、交流から学んでほしい」と生徒、学生たちに期待する。



ペアになって日本語のあいさつを練習する生徒=13日、フィリピンの八戸学院カーテル校

同財団関係の語学学校「CNE1」が2

017年、光星学院が運営する八戸学院大学生らの留学先となったことから、今回の取り組みに発展した。

医師である同財団のキャリア・アレナス理事長は「教育の充実が貧富の差の解消につながる。言葉や文化の壁で挫折してしまうことのないようにしたい」と、開校の意義を語る。少子化や人口減少が進む中、国際化に向けかじり切った光星学院の法官新一理事長は「自分たちの未来をどう描いていくか、交流から学んでほしい」と生徒、学生たちに期待する。

◇

日本国内の人手不足を受け、政府が新たな在留資格の創設を打ち出すなど、外国人労働者の受け入れ拡大に向けた動きが加速している。本県とフィリピンの教育機関が手を携え、人材を育て日本での就労につなげる取り組みの展望を探る。

(新村菜穂)